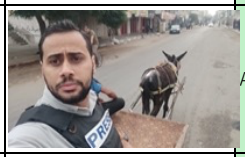
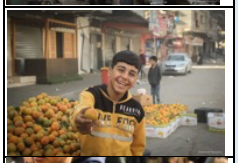
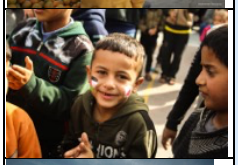
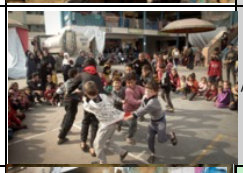
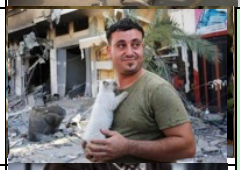
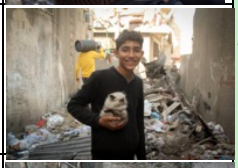
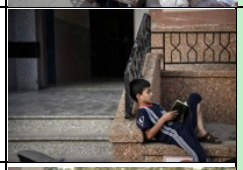
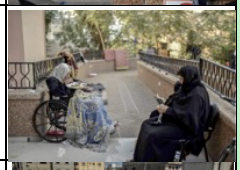
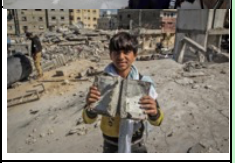
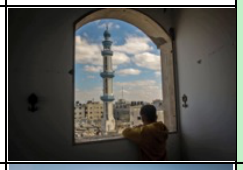
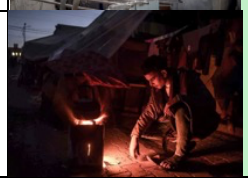
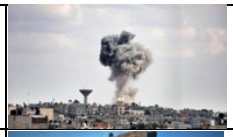
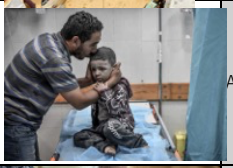
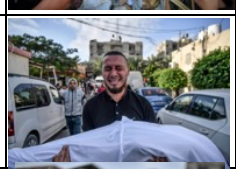
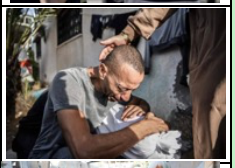
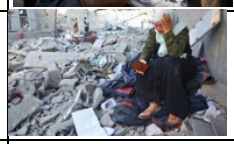
番号		印刷サイズ	撮影詳細	キャプション
Ⅰa		A2	撮影日：2009年8月3日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：石橋優子	モハマッド13歳 2008年末から2009年初めにかけて、ガザ地区は連日空爆に見舞われた。心のケアの活動に参加していたモハマッド少年の強い意志に惹かれた。
Ⅰb		A2	撮影日：2010年6月21日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：後藤明子	モハマッド14歳 最初の出会いから約１年後、心のケアの活動で描いた夢や希望の絵。この時は、あたたかく前向きな思いを感じられるような、やさしい色合いの絵を描いた。
Ⅰc		2枚を一つにまとめてA3	撮影日：2009年8月4日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：桑山紀彦	Ⅰc（上）「忘れられないあの日」 「色は自由の象徴。空爆され、占領されている自分たちの街に色はない」とモハマッドは言った。 Ⅰc（下）「夢や希望」 「いつか日本に行きたい。戦争から立ち上がった日本をこの目で見てみたい」と、街に色をつけた。
Ⅰc			撮影日：2010年7月29日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：桑山紀彦	
Ⅰm		A3	撮影日：2023年11月13日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour 協力：朝日新聞	モハマッド26歳 ガザ戦争が始まった直後から、彼はPressと書かれた防弾チョッキに身につけ、ガザ各地での取材を開始した。すでにガソリンなどの入手が難しくなっていたため、移動はロバで行っていた。
Ⅰp		A3	撮影日：2025年1月21日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Nour Imad **協力：朝日新聞**	モハマッド28歳 モハマッドはジャーナリストであるが、地球のステージのガザスタッフでもある。脆弱者への食糧物資支援を実施。この頃は一時停戦後で物資配布ができたが、現在物資はほぼ入手できず、ガザは飢饉の重大なリスクに直面している。

入3		4枚を一つにまとめてA２とする	撮影日：2023年11月25日 撮影場所：ラファ, ガザ地区 協力：朝日新聞	戦争下や過酷な状況で、モハマッドが見つけ色彩。いずれもガザの人々の優しさや強さを感じることができる、ガザを愛したモハマッドの代表作。
			撮影日：2023年11月25日 撮影場所：ラファ, ガザ地区 協力：朝日新聞	
			撮影日：2024年1月8日 撮影場所：ラファ, ガザ地区	
			撮影日：2025年1月19日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 協力：朝日新聞	
Ⅱ①d		A4	撮影日：2023年11月4日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour 協力：朝日新聞	「食糧探し」に活躍するのは子どもたち。子どもたちは連携し、食糧がある場所の情報交換しながら食糧を確保していく。
Ⅱ①h		A4	撮影日：2023年12月2日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour 協力：朝日新聞	戦争が始まり、電気がほとんど使えなくなった。仕立屋のアエド・サルハさんは自転車の車輪で動くミシンに改造。アエドさんの息子ムハンマド君は、自転車こぎのお手伝いでお父さんと話す時間が増えたと喜んでいる。 （朝日新聞デジタル、2023年12月6日記事より）

Ⅱ②a		A4	撮影日：2025年3月6日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	「学校が再開すると聞いた時は、期待で胸が膨らんだ。でも校庭から聞こえる歓声、楽しいおしゃべり、椅子に座っていた環境、全てが今はもう存在しないことを思い知らされた」（アスマ・アブスルタンさん17歳）（朝日新聞デジタル、2025年3月2日記事より）
Ⅱ②c		A4	撮影日：2025年3月6日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	瓦礫からノートと鉛筆を見つけ出した少年。戦争は子どもの学びすら奪っていく。
Ⅱ③c		A4	撮影日：2023年12月11日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	連日、200名近い子どもたちが活動に参加。周囲には父母が小さい子どもたちを見守り、避難所全体に笑顔が見られるようになっていった。
Ⅱ④a		4枚を一つにまとめてA3	撮影日：2023年10月22日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	戦禍でも小さな命を守り、愛でるガザの人々。 右下の写真（Ⅱ④d）で、空の鳥籠をもつ姉妹は飼っていた小鳥を逃し、ハンユニスへと避難していった。
Ⅱ④b			撮影日：2023年10月22日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅱ④c			撮影日：2023年10月25日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour 協力：朝日新聞	
Ⅱ④d			撮影日：2024年5月15日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour 協力：朝日新聞	
Ⅱ⑤a		4枚を一つにまとめてA3	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	ガザ地区住民のほとんどがイスラム教徒で、イスラムの教えが心の拠り所。 左下の写真（Ⅱ⑤c）の少年は瓦礫からコーランを見つけ、満面の笑みになった。
Ⅱ⑤b			撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅱ⑤c			撮影日：2024年11月23日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者： Mohmmed Mansour	
Ⅱ⑤d			撮影日：2024年11月23日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅱ⑥a			撮影日：2025年3月6日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	

Ⅱ⑥b		4枚を一つにまとめてA3	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	「人々は希望を持って生きていけなくなった。私もその一人だ。」（モハマッド・マンスール）（朝日新聞デジタル、2024年4月6日記事より）
Ⅱ⑥c			撮影日：2024年11月23日 撮影場所：ハンユニス、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅱ⑥d			撮影日：2023年12月6日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	

Ⅲ①a		A4	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	遠くに着弾した。爆炎の大きさに、破壊の威力や大きさを知った。
Ⅲ①b		A4	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	大地が深くえぐられた着弾跡。多くの人が救出作業を見守る。
Ⅲ①c		A4	撮影日：2023年10月29日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	レンガとセメントで作られる建物。攻撃で空洞化し、骨組みだけが残されている。ガザでは家族が増えると上層階に建て増しする。建物から伸びる鉄筋は未来への希望だった。
Ⅲ①e		A4	撮影日：2023年12月7日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	「今度もテント暮らしなのか。いつか自分の家を取り返して生活を始められるのか」（モハマッド・マンスール）
Ⅲ③a		A4	撮影日：2023年10月21日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	「子どもたちは、ハマスなんて知らなかった。もちろん、何の関係もなかった。」（7歳の息子を空爆で亡くしたアマル・アルハワジャさんの言葉より、朝日新聞デジタル、2023年11月11日記事）。至る所で子どもたちが被害を受けている。
Ⅲ③d		A4	撮影日：2024年3月5日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	少女の空虚な瞳が、凄惨な戦争を物語る。
Ⅲ③e		A4	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	破壊された建物から幼い子どもを救出する。
Ⅲ④a			撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ガザ市、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	

Ⅲ④b		4枚を一つにまとめてA3	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ガザ市、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	誰もが、家族、親戚、友人など、大切な誰かを失い深い悲しみにくれる。
Ⅲ④c			撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ガザ市、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅲ④d			撮影日：2023年10月11日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	
Ⅲ⑤c		A4	撮影日：2023年11月6日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	病院には次々を負傷者が運び込まれてくる。この病院も建物の外にベッドや機材を置き、負傷者の手当てを行っている。
Ⅲ⑤f		A4	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	戦争の攻撃により、ケガをして病院に運び込まれる少年。医療スタッフの懸命な治療が日々続けられている。
Ⅲ⑤g		A4	撮影日：2023年10月18日 撮影場所：ラファ、ガザ地区 撮影者：Mohmmed Mansour	突然の避難を強いられ、子どもも大人もみんな疲れきっていた。大人は両手に荷物を抱えて避難するので、長い距離を歩けないような小さな子どもであっても、自分の足で歩いて避難する。